

ルポ●新しい暮らしの可能性を訪ねて

「共生型すまい」という 一つ屋根の下の他人家族

「ここは楽しいわよ。門限はないし、一人でいたいときには一人でいられるし」と笑いながら案内してくれた。「嫌なこともあるでしょう」と尋ねると、「そういうときは部屋にひっこむわよ」との答え

女団士の助け合いの威力

昨年7月、念願のコーポラティブハウス（協同組合住宅）に入居した。コーポラティブハウスは住人が建設組合を作り、土地購入から住宅建設までを話し合って決める。入居までに2年近い時間がかかるが、共用部分などの打ち合わせのため、に何度も集まるので、入居時点ですぐに住人間にコミュニティが生まれているというメリットがある。私がコーポラティブハウスに住みたいと思ったのも、このコミュニティのある暮らしに惹かれたからだ。

しかし、このコーポラティブハウスがそれまで住んでいた賃貸マンションから遠く離れた場所だったなら、私は購入しなかったにちがいない。私には現在、小学校1年の息子がいるが、遠くへ引っ越ししてしまえば、5年間の保育園生活のなかで生まれた保育園ママのネットワークを手放すことになるからだ。残業や飲み

会のときなど、「お互いさまだから」と言って気軽に子どもをあずけ合う仲間がいるかいないかは、働く母親にとってはかなり重要なことではないだろうか。

近頃、この女団士の助け合いの威力を知ってかどうか、女団士が集まって住む人々が増えているという。そういえば、いまや若い世代ではルームシェアがごく普通のことになっているし、高齢者向けのコミュニティホームの話もちらほら聞くようになった。「何人かで集まって暮らし、他人同士で支え合うすまい」を「共生型すまい」と言うが、「共生型すまい」に関心を持つ人たちを横断的につないでいるNPO、「共生型すまい全国ネット」の岡本健次郎事務局長も次のように話す。「共生型すまいには高齢者が共同生活をするグループリビングやグループホーム、共用空間を広く取った集合住宅のコレクションハウスなどがあります。私たちが把握しているものだけで、現在、全国に15軒ありますが、特に女性に関心を持つ

取材・文◎ おかだなおこ
岡田尚子（ライター）



コレクティブハウス「かんかん森」のコモンスペースにて。世代を超えた一つのコミュニティが作られている

ているようです。各団体が入居者募集をしても、応募してくるのはほとんどが女性ですから。女性のほうが長生きという現実もあるのでしようが、高齢者や独身女性だけでなく、主婦同士が「いずれはいっしょに住みましょう」と話しているのもよく聞きます」

女同士で暮らすとうとしている女性は確かに増えているようだ。しかし、「同居」である。しかも、「女だけ」である。個室はあるだろうけれど、トラブルが起きないとは考えにくい。それに、ベツタリしすぎた拳句にケンカ別れするというのは、女の得意技ではないか。女同士で住むと、現実にはどんな暮らしが営まれることになるのだろうか。

「一番もめたのは掃除でした」

まずは若い世代のルームシェアの現場を見てみよう。訪ねたのは、北浦和で2DKの賃貸マンションを3人でシェアする又吉博子さん、さゆりさん姉妹（ともに30歳）と、姉妹の友人である佐和田優子さん（32歳）だ。3人は沖繩出身で、中学時代からの友人なのだが、シェアのきっかけは、今から6年前、さゆりさんと佐和田さんが「東京で働こう」といっしょに上京したことだった。

「大都会での一人暮らしは不安なので、最初から二人で暮らすつもりでした。家賃も半分ですみますから」（佐和田さん）
千葉、綾瀬と移り住み、現在の北浦和での生活は3年目になる。姉の博子さんが加わったのは、2年前からだ。現在の家賃は6万8000円。それに光熱費などを加えた金額を等分に負担している。ただし、食事はバラバラだ。冷蔵庫の中

も3つのスペースに分かれているという。

「初めは当番制で食事を作っていたのですが、どうしても上手下手というのがあつた。味の好き嫌いもある。で、結局は今のような形に落ち着きました。でも、一番もめたのは掃除でしたね。モノが出ていない状態が好きにならなくて、佐和田さんは手を伸ばしたところに必要なモノがあるのがいいというタイプ。つまり、同じ「片づけた」という言葉を使っている、その内容が違うんです」

と、さゆりさんが言う。佐和田さんが、「だから私は、なんでさゆりさんが怒っているのか、わからなかったんですよ。私としてはキレイに片づけたつもりだったから」

と言いつつ。すると、博子さんが、「これだけは譲れないというポイントがみな、ちがうんですよ。妹は確かにキレイ好きだけど、水回りの汚れには無頓着。いっぽうの私は水回りにカビが生えてくるのだけは我慢ができないので、お風呂場の掃除担当。で、佐和田さんは食器洗いのあと、シンク内に水滴が残っているのが大嫌い。彼女と暮らすようになってからは、私も妹も食器洗いのあとはシンク内を拭くようになりました」

3人は、これほど長くシェアが続いて



「詮索し合わないことが大事」と松原さん

いることについて、「とことん話し合つて、何度もケンカしてきたから」と言う。「シェアが原因で仲が悪くなったりしないよう、お互いの嫌なところは言い合つて、どんどんケンカをしよう」と最初に決めたんです。しばらくは毎晩、何時間も話し合っていました」（さゆりさん）

話し合えたのは、女同士だったからだと思う。女同士なら意識も対等だし、話し合おうという姿勢がありますから。相手も男性ならこうはいかない。どうしても男性には「女」というのはこういうもの」という先入観があるから、対等に話し合えないんです」（佐和田さん）

なるほど。これはおもしろい指摘である。女同士は「意識が対等」なのだ。だからこそ本音で話し合える。女が女同士で暮らしを選ぶ大きなポイントかも。

でも、彼女たちがうまく続けているのは、若いからでは？ 作家で「SSS」というシングル女性のネットワーク代表の松原惇子さんから、「今の若い人たちは詮索し合わないし、本音と建前を区別しないですよ。だから共同生活ができるんだと思う」と聞いて、そう思った。そういえば、佐和田さんたちも「話したいことだけ話す。相手が話さないことを聞いたり話さない」と言っていた。冷蔵庫内を3分割するというのも、ドライといえはドライである。

「これが中高年世代になると、違うのよ。やたらに他人の動向を気にするし、冷蔵庫の中のもの、好きに食べて」と言い



ながら、誰かが本当に好きに食べたらムツとしちゃう（笑）。で、そういう小さな不満が積もり積もつて、最後はケンカ別れになっちゃうの」（松原さん）
実は松原さんには、以前、グループリビングを志したものの、途中で断念したという経験がある。

「私は自分も独身だし、周りに独身女性が多かったこともあって、年を取ったとき、シングル女性が一つ屋根の下に自立しながら住んで、助け合いながら暮らしていければいいな」と思ったのね。で、94年に講演会場などで呼びかけたたら、40代を中心に30人ほどが集まった。分譲型の集合住宅を建設することを考えていたので、月に一度、住宅関係の専門家を呼んで、勉強会を開いていました」

しかし、4年後、松原さんはメンバーに「解散しよう」と持ちかけた。

「いっしょに暮らしたいという思いが共通だっただけで、入居希望時期も経済状況も住みたい地域も全部がバラバラだった。それに、関わり合ううちに、お互いの欠点が目につきましたというのも大きかった。だから、私にできるアドバイスがあるなら、共生型すまいでは他人に興味を持ちすぎないということですね。そしてあまり小さな集団のところは選ばないこと。人数が少ないと人間関係が煮詰まったときに逃げ場がないでしょう」

どうやら「本音と建前を区別しないこと」と「他の入居者と適度な距離感を保つこと」が、共同生活をうまく続けるポ

イントらしい。

必要なときに助け合える暮らし

では、実際に共生型すまいで暮らすことを選んだ女性たちは、この点をどのよう

にクリアしているのだろうか。
東京の日暮里で画期的な試みのコレクティブハウスがオープンしたと聞いて、早速、訪ねてみた。2000年6月から計画がスタートし、この6月から入居が始まったばかりという賃貸方式のコレクティブハウス「かんかん森」だ。「かんかん森」は全28戸。約25㎡から60㎡まで、ワンルームから2DKまでの部屋があり、家賃は7万円台から17万円台。礼金・敷金は家賃の4カ月分だ。

と、ここまで聞くとただの賃貸マンションだが、ここから先がすごい。まず、住人全員で共有する約100㎡のコモンスペースがあつて、そこにキッチンをはじめ、集会にも使えるダイニングやリビングが広がっている。しかも、平日の3日間は、コモンミールといって、いくつかのグループに分かれた入居者が交代で希



上/コモンスペースで話し合う「かんかん森」の住人たち
下/「監報係」などの係名が並べられたコピーや見学者たちを案内する階の図面を手に、定例会は3時間以上に及んだ



望者全員の夕食をコモンキッチンで作り、みんで食べるという。また、そういう共同作業の便宜をはかるため、プリペイド方式の内部通貨も作るというから驚く。

取材当日は、月に1度の定例会がコモンスペースで行われていた。男性の姿も見かけるが、やはり女性が多い。資料を見てさらに驚いた。「会計係」「広報係」「地区対応係」などの係名が並び、そのうえ、「ホームページの作成・管理・運営」「ビデオ作成」「マスコミ対応」「書籍発行」といった言葉も並んでいる。みんな分担していくにしても、負担が重いような気がするのだが。彼女たちにはな「ここでは暮らしを選んだのだろうか」「私はずっと実家住まいで、仕事にかまけて家事はすべて親任せ。生活者としてもっと丁寧に暮らしたくてここに参加したので、定例会やコモンミールを負担と感じたことはないですね。むしろ積極的に楽しみました。それに、都会での女性の一人暮らしにはいろいろ不安が多いけれど、共生型すまいなら安心」と、明るく答えてくれたのは宇井純子さんだ。同

じく一人で入居する姫野亜紀さん(39歳)も、ずっと一人暮らしをしてきたけれど、普通の賃貸マンションでは地域から孤立している気がして嫌だった。実家が自営業で、大勢の人が出入りするなかで育ったので、他人の間でもまよれながら暮らすのが私には合っている」との答え。

人づき合いが大好きで、濃密な人間関係も平気な人でないと、共同生活は難しいのだろうか。ベッタリしすぎると、いざその反動がありそうだが……。「その点にはみんな、気をつけていると思います。だって、私たちは仲良しグループではなくて、必要なときに助け合える暮らしがほしいわけだから」と話すのは、木村ひろ子さん(58歳)だ。木村さんは、設計士という仕事の関係上、以前からコレクティブハウスに注目していたと言う。

「働きながら3人の子どもを育ててきたけれど、住まい方から考えないと女性は自立できないと思っていました。その点、コレクティブハウスは生活の一部を共同化するから、仕事と家事・子育てが両立しやすくなる。事実、この『かんかん森』にはいろんな世代の人がいるので、子育てもしやすいし、高齢者も部屋にひきこもらなくてすむと思います」

この木村さんの言葉を裏づけるのが、Sさん(70歳)だ。彼女は「年を取ると自分が役に立つという実感をなかなか得られないけど、ここでは小さい子どもの面倒を見てあげられるし、若い人の相談にものれるでしょう。そこがうれしいんですよ」と話してくれた。

共生型すまいを選ぶにはいろんな動機があるのだと思いつながら、定例会を眺め

る。議論百出で、なかなか議事が進行しない。とはいえ、みんなが率直に意見を言い合うようになったのは最近のことなのだとか。大学院生の鳴崎東子さん(32歳)は、「約2年間の話し合いを経て、みんな、変わってきたんです」と教えてくれた。

「私自身一人っ子で、人づき合いが苦手だったのが、今ではそうでもなくなりました。定例会のおかげで、人の意見も聞きながら、自分の考えも伝えるというコミュニケーション能力がついたのかも」
そういえば、木村ひろ子さんも「自分というものがいない人は、周りに引きずられて辛いかもしれない」と言っていた。先に「共同生活をうまく続けるには、『本音と建前を区別しないこと』『他の入居者と適度な距離感を保つこと』と書いたが、そのためには、自分自身の考えをしっかりと持つこととコミュニケーション能力が不可欠なようだ。

「裸の付き合いができる」
最後に、グループハウスのさきがけとして有名な「さくら I・II」(さいたま市)を訪ねることにした。「I」は、89年、浦和市議だった小川志津子さんが自宅を建て替える際に設立したもので、この6月に94歳の女性が亡くなり、現在は、68歳から92歳までの4人の女性が暮らしている。部屋は基本的に6畳間にトイレという組み合わせで、食事は3食とも共同の台所で自炊し、共同の食堂でいただく。家賃は食費込みで11万円、入居金として200万円が必要だ。

一方、競売物件だったという社員住宅つき事務所を改装した3階建ての「II」

特集 頼りになるのは、やっぱり女

は02年4月のオープンで、1階部分にはダイソービスセンターやヘルパーステーションが入っており、2・3階部分に単身者4世帯、親子1世帯、夫婦1世帯の計6世帯、68歳から93歳までの8人が住んでいる。部屋の広さも1DKから3LDKと、「I」に比べて広い。利用料は月に1室食事つきで12万2000円だが、入居時には部屋の広さによって500万円から1650万円までの入居金が必要だ。

「I」の設立に当たって、小川さんは、「プライベートを徹底的に重視するため、トイレとポストは必ず専有」「自立を支援」「オーナーである自分と入居者はまったくの対等」の3点に留意。これまでの14年間で3人が亡くなり、2人が痴呆対応などの施設へと転居したが、大きなトラブルもなく、やってこられたそうだ。

「むしろ、元気になった方が多いみたいよ。グループ内でも若い60代の人に時給800円を払って、90代の方の面倒を見てもらう、というようにもしていますから、生活に張りが出てくるんじゃないかしら。もちろん、小さなケンカはありますよ。食事の「うまい・まずい」から始

まって、炊飯器が私の席の近くにあるから、いつも自分がみんなのお代わりをよそわなきやいけない」「私の席からだとテレビが見えにくい」とかね。だから、月に2回のミーティングでは、どんなことでもしつかり話し合っていました。ただし、みなさん、共同生活をしようという覚悟で入居なさっているわけです。だから、そんなにひどいことにはなりません（小川さん）

ご主人に先立たれたのがきっかけで、9年前に「I」に入居したという瀬和美子さん（68歳）に、「I」を案内してもらった。瀬和さんは、「ここは楽しいわよ。門限はないし、一人でいたいときには一人でいられるし」と笑いながら、「ここが台所と食堂ね。今日は作るのが面倒だから、夕食にはお寿司を買ってくるつもり。で、お風呂がそこで、洗濯機がここ。あつ、私の部屋にも寄っていいよ」と案内してくれた。「嫌なこともあるでしょう」と尋ねると、「そういうときは部屋にひっこむわよ」との答え。「ケンカなんかは？」との問いには、「そりゃあ、いろんな人がいるからね。言い

たいことを言う人もいるし、言えない人もいる。だから、私、代わりにいろいろ言うってあげるよ」。

と、そこへ92歳の中里キンさんが2階から降りてきて、「お寿司は何がいいかねえ」と相談し始めた。高齢者だけの暮らしと聞いていたので、ひっそりしているとはかり想像していたのだが、この明るさは、やはり女性ならではのものだろう。2人の姿を見ていたら、「本音と建前」や「距離感」といった言葉を超えた、「女同士」の裸のつき合い」をひしひしと感じた。



上/「さくらI」裏手のハーブ園でラベンダーを刈る小川さん（左端）たち 下/和やかな空気が漂う食堂

今回、さまざまな形で共同生活をしている女性たちを見てきたが、女同士で住みたいと考える女性が増えるのは自然なことだと思った。一人暮らしの不安も解消できるし、経済的にもお得になる。高齢者の場合なら、その安心感は若者の数倍にもなるだろう。しかも、女同士ゆえ家事能力は充分だし、共通の話題にも事欠かない。共同生活をうまく送るためのコツや心構えはいろいろとあるが、今後女同士が集まって住む人々は増えこそすれ、減りはしないように思う。

撮影◎青地あい